

2023 年度 入学試験問題

国 語

(第 1 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、【現代語訳】は本校でつけ加えました。

① 「邯鄲の夢」という古い中国のお話があります。

盧生という名の若い男が都（邯鄲）に出て一旗揚げようと故郷を後にする。そしてある村を通りかかったとき、白髪の老人（呂翁）に「お若い。そんなに急いでどこまで行くのじゃ」と呼びとめられる。青年は貧相な老人を見下し、立身出世する自分の野望を語る。これを聞いて「ほう。それは、大儀なことじゃ。では、この枕でちよつと休んでいきなされ」と老人は答える。老人の休んでいる旅籠の店先にはうまさうな野菜や魚が並べられている。野望に充たされた若者は老人の饗応など受ける暇はないと、彼を払いのけて進もうとしますが、「まあ、ここらで休むのもいいだろう。ずいぶん歩いてきたことだから」と思いなおして足を止めます。

旅籠の主人が黄梁を炊いているあいだ、つい若者はうとうと眠り込んでしまう。そして、美しい妻とかわいい五人の子供たちに囲まれ、コウダイな邸宅に住む夢を見る。夢の中で、若者は波瀾に富んだ人生を送り、思いどおり大出世したわけなのです。

すると、……どこからか「もしもし」という声が聞こえる。「さあ、ご飯が炊けましたよ」。若者はハッと目を醒ます。妻も子供も邸宅もかき消え、自分が元の見すばらしい一人の青年であることを悟ります。あれほどの大ドラマは、じつは飯が炊けるあいだの夢だったのだ！ 若者は大きなショックを受けます。何もかも見通している老人は、ただにこやかに若者を見ている。彼は自分の抱いていた野望の虚しさを悟り、その足で故郷に戻ってゆく、というお話です。

これを聞いて「なるほどそういうことか、人生が夢のように虚しいと言いたいのだな」という了解で終わってはならない。このお話に潜む豊かなヒントを読みとり、分け入ってゆくと、そこには「時間」という大きな問いが控えております。この物語は昔からのわれわれの人生（すなわち時間）に対する直観を物語っている。それは、大変説得力のあるもので、われわれの人生自体は本物の目（老人の目）から見ればこの若者がみた「一炊の夢」のようなものだ、という直観です。

若者の体験はよくわかる。だが、人生自体をこの夢に移しかえて「一炊の夢」という言葉で何を意味しているのか、と突きつめてゆきますと、じつはそれは何ごとも語ってはいないのでないか。人生を夢と譬えても、それから「醒める」経験を現にもっていないわれわれには、その譬えはうまく機能しない。夢の意味了解には「醒める」という経験が不可欠のものとして含まれているのに、^② それから醒める経験を含まない人生を「夢」と呼んでも無意味である、というわけです。

だが、はたしてそうでしょうか。こう指摘されてわれわれは一挙に「夢」という言葉の誤用に気づき、死の床で「人生は一炊の夢のようだ」と溜め息をつくことをやめるでしょうか。どうも

そうではないようです。

よく考えてみますと、人生を夢と譬えることによって、われわれはかならずしも夢である現世から「醒めれば」別のもっと現実の世界に生きるようになるということを理解しているのではない。つまり、醒めた後の状態はこの場合不可欠の要因ではなく、いかなる確定的な来世の期待なしにも、単純に人生は夢のようなものだ、しみじみ思いたくはないではないでしょうか。

では、それはいかなる了解なのか。これは、以上のような表層の論理ではなく、もっと根深いわれわれの実感にもとづいているようです。

それはどのような実感なのか、答えを保留して想い起こしてみますと、人生を夢に譬えることはほかにいくらでもあります。『新古今和歌集』^③には、人生や恋の儂さの譬えとして

「 」という言葉がたくさん出てきます。とりわけ アッカン^bは次のものです。

風通ふ寢覚めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢（藤原俊成女）

ぼんやり霞む大気や散りゆく桜花のイメージと相まって、春は秋にも増して、人生の虚しさを実感させてくれる時のようです。例えば「春高樓の花の宴……」とか「ああ玉杯に花受けて……」とかの歌を聞きますと、私は青春の盛り春爛漫に漂う虚しさを痛いほど感じます。霞たなびき陽炎の揺れる春の季節こそ、現実世界が最も夢に近いものとなり、そこで甘美な夢に耽り夢の世界にそのまま入りこむというイメージもわき出てくる。有名な「莊子胡蝶」の世界です。

【現代語訳】

昔は莊周、夢に胡蝶となれり。ひらひらと舞いて胡蝶なり。自ら愉しみて志に適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然にして覚むれば、まぎれもなく周なり。周の夢に胡蝶となれるか、胡蝶の夢に周となれるかを知らず。……	むかしむかし、莊周というものが夢の中で蝶になった。ひらひらと舞っていて蝶そのものであった。心底楽しんでいて、思い通りに舞っていたのだ。自身が莊周であることを忘れてしまっていた。突然目覚めると自身は蝶でなく莊周であった。莊周の夢の中で蝶になったのか、蝶の夢の中で莊周となったのかわからなかった。
--	--

そして、桜の花の散り方は——梅などと異なり——時間のイメージに訴えやすい。一斉に、しかも目で追えるほど適度の速さで、はつきりした形状をとって花びらが散ってゆき、梢から地面までその散りゆくあいだの空間も充分に広がっている。この花びらの乱舞する運動と重ね合わせ、時間の経過を読みこむこと、いや二重写しのようにイメージすることは、きわめて自然です。

さまざまのこと思ひ出す桜かな（芭蕉）

芭蕉は眼前の桜花を見ながら過去のさまざまな情景を思い描いている。^④この心境は、私には「莊子胡蝶」の世界にきわめて近いように思われます。夜桜の方がいいでしょう。暗い背景に桜花がくつきりしろじろと浮かびあがっている。そして、その花びらはハラハラ舞い踊りながら深い闇の中に吸いこまれてゆく。その闇に過去の情景を思い浮かべながら、芭蕉は一瞬現在に生きているのか過去に生きているのかわからなくなったにちがいない。現実感覚を離れた不気味な、まさに夢のような世界がそこに繰り広げられております。

このように、人生を夢と譬えることは単なる勘違いや偶然とは思われません。そこには、時間に対するある根本的洞察が潜んでいるような気がします。夢にわれわれは単に儂さを見ているわけではない。

ここで、とりわけ夢の過去性に注目する必要があります。夢とはことごとく「みた」というかたちで、すなわち「もはやない」というかたちで意味づけられるのです。そして、じつはこれまでの各人の人生とは——いかに波瀾に富んだものであろうと——この短い現在という時をノゾいてことごとく「もはやない」過去のことなのです。われわれは自らの人生の大部分を「もはやない」時として了解しているのです。

としますと、「人生一炊の夢」とは、人生とはいつかは醒める夢をみつつある時のようなものだという意味ではなくて、わが人生とはわが過去にほかならず、わが過去であるかぎりの^⑤人生とは、その基本的な存在様式において夢という存在様式と区別しえないほど酷似している、という意味ではないかと思われまます。

この現在という一時をノゾいてすべて過去世界であり、すでにいかなる仕方でも知覚の到達できない世界です。あなた自身が昨日体験したことですら、いかにアリアリとその記憶が残っているようにも、それは見えず・聞こえず・触れられず、その意味でその存在はまさに夢のように儂いものである。つまり、「邯鄲の夢」というお話は、人生の儂さを一般的に語っているというより、それぞれの人生の大部分を占める過去の儂さを直感的に語ったものではないのか。七〇年前も数時間前も、過去は現在知覚が到達できないという意味で、まったく同じように儂いのです。

さらに、人生を「悠久の夢」ではなく「一炊の夢」と譬えているところが、「邯鄲の夢」というお話のもう一つのポイントでしょう。つまり、この夢の譬えの中心にその「短さ」があります。ここでも、長い苦しい人生という夢から醒めて死後あの世からそれを振り返ればじつは「一瞬のこと」であった、というようなおとぎ話をもち出す必要はありません。

若者が経験した人生は夢の中では、五〇年におよぶ大ドラマでした。しかし、醒めてみると、それはたった数時間の夢だったのです。同一の体験が、進行中のときはそれ相応に「長い」のに、過去に退いた途端に「短く」なること、この大きな差異は日常的に誰でも奇妙な感じとともによく知っていることです。

いかに平凡に見える一日でも、じつは新鮮な出来事に溢れ限らない変化に富んだ豊かな舞台

なのですが、夜ベットの途中で思い起こすとアツという間に終わってしまっている。朝からの出来事を詳細に次から次に思い出している。まとめてみるとやはりまったく「厚み」が感じられず、昨日の夜のすぐ隣に今日の夜がある。

夏休みも、いかにそこに刺激的な体験が詰まっていようと、終わってしまえばやはりアツという間であつた。今年もアツという間に過ぎた。一〇年間もアツという間のことであつた。これまでの人生もアツという間であつた。とすると、死の床で七〇年あるいは八〇年の一生を振り返ってもやはりアツという間であつた、と感ずるにちがいない。誰でも知っていることですが、人生の「客観的な長さ」は振り返ったときの実感にまったくそぐわないのです。

秀吉の「ジセイの句」……難波のことも夢のまた夢」も、まさしく死の床において過去の儂さの実感を訴えたものです。過去の人生が華々しければ華々しいほど、今死にゆく身から振り返るとそれはあたかもなかったかのように儂いものとして実感される。たしかに、俺は今自分にひれ伏す名高い武将や金銀の調度に囲まれ豪華絢爛たる一室に横たわる天下人である。ここに至るには、困難ないくつもの山を越えてきた。だが、今あらためて振り返ると、不思議なことに、アレだけのことをしてきたのに、その一つ一つをまざまざと憶えているのに、泥にまみれて遊んだ少年がたちまち白髪になり今死ななければならぬようなのだ！ その齟齬、実感の差がまさに「夢のまた夢」のように不思議なのです。

和泉式部が、熱い恋に明け暮れた日々の日記を「夢よりもはかなき世の中を……」と書きはじめているのも、同じ心境なのでしょう。沸騰した体験であればあるほど、それが過去に転じ「もはやない」ことを実感しますと、とても不思議な気がします。

いかに長く豊かな人生でも、振り返ればやはり「一炊の夢」のようなものである。時間の「長さ」に対する懐疑は過去時間の客観的長さに対する懐疑であり、それがいかなる実感も呼び起こさないということこそ、この譬えの要なのではないでしょうか。旅籠で不思議な夢をみた若者は、実人生で何もしないうちに華々しい生涯を送った後に死ぬときと同じ実感を獲得してしまった。逆に言いますと、多分一〇〇年の波瀾に富んだ人生でも、死ぬときの実感若者が「もしも」と揺り起こされてふと目を醒ましたときと同じだろう、ということなのです。

（中島義道『時間を哲学する—過去はどこへ行ったのか』より）

問1 — 線 a ～ d を漢字を用いて書きなさい。送り仮名となる部分はひらがなに直しなさい。

問2 この文章からは次の段落がぬけています。この段落を正しい位置に入れたとき、直後に来る三字をぬき出して答えなさい。

しかし、この直観をいざ論理的に探^{さぐ}ってゆきますと、次から次に疑問がわき出てきて収拾^{しゅうしつ}がつかなくなる。そこで、多くの哲学者は、ここにはトリックが仕掛^{しか}けられており、わかたつもりになっているがじつは何にもわかってはいないのだ、と決めつけます。

問3 — 線① 『邯鄲の夢』という古い中国のお話があります」とありますが、筆者がこのお話を挙げたのはどうしてですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 盧生青年のように自分の将来への高望みを安易にさせないため。
- 2 すばらしい人生でも夢のようにむなししいものであることを述べるため。
- 3 「時間」というものについて具体例から考えてもらうため。
- 4 人生を振り返って夢のようであると溜め息をつくことを戒^{いまし}めるため。

問4 — 線② 「それ」が指し示すことばを一単語でぬき出しなさい。

問5 — 線③ 「人生や恋の儚さの譬^{たと}えとして」『』という言葉がたくさん出てきます」について次の問いに答えなさい。

- (1) 空らん に入る語句を藤原俊成女の和歌から七字以内でぬき出しなさい。
- (2) — 線⑦ 「……難波のことも夢のまた夢」の全文は以下の通りです。この中から(1)の答えと同じ意味を表すことばをぬき出しなさい。

露^{つゆ}と落ち 露と消えにし わが身かな 難波のことも 夢のまた夢

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「僕」とじゅんちゃんは同じ団地のお隣に住む幼なじみであり、小学一年生からずっと同じクラスで席もいつもとなり同士であった。じゅんちゃんは、ふつうの子とは違っていいことから、トラブルを起こすことが多かったが、そんなときはいつも「僕」が助ける役目だった。

三年生の一学期あたりまでのじゅんちゃんは幼稚園の頃と変わらず人気者だったが、二学期に入ると教室の雰囲気が変わってきた。

じゅんちゃんが授業中に騒いでも、みんないままでのようには笑わない。また始まった、という顔になって、そっぽを向いたりうつむいたりしてしまう。

実際、じゅんちゃんにはなにか冗談を言うわけではない。いきなり立ち上がって大声を出したり、すつとんきような声でたためな歌を歌ったり、ひょうきんな身振りで踊ったりするだけだ。いままではそれが面白かった。一つひとつの言葉やしぐさというより、恥づかしいことを恥づかしがらずに、やっではいけないことをやってしまう——じゅんちゃんはみんなとは違うんだ、ということを実笑っていたのだ。

でも、それは、授業の邪魔になることと紙一重だった。

僕たちは少しずつ、じゅんちゃんの騒がしさを迷惑と感ずるようになっていた。

勉強の内容が難しくなってきた。テストや宿題も増えてきたし、引き替えに、授業中に先生が冗談を言ってみんなを笑わせる回数が減った。授業中の教室が静かになればなるほど、じゅんちゃんは退屈する。体をもぞもぞさせて、机を太鼓のように手のひらで叩いて、やがて声をあげはじめ、誰にもかまってもらえないとよけい意地を張って大声を出しつづけ、最後は教室を飛び出してしまった。「1」

先生は黒板に自習用の問題をいくつか走り書きしてから、やれやれ、まいったなあ、という大きなため息をついて、一人でじゅんちゃんを探しに行く。

クラス担任は、山口先生というまだ若い男性教師だった。マイペースすぎるじゅんちゃんの行動にいつも困っているのは、僕たちにもよくわかっていた。一年生と二年生のときの河合先生はベテランの女の先生だったから、じゅんちゃんを叱るときもお母さんみたいな言い方だった。でも、山口先生は本気で——というより、心の中のブレーキがはずれたような怒鳴り声をあげて、じゅんちゃんを叱る。グラウンドで遊ぶじゅんちゃんを教室に連れ戻すときの手の引っぱり方は、荒々しくて、不機嫌そのもので、ときには悔しさなのか情けなさなのか、目が赤く潤んでいることもあった。「2」

でも、じゅんちゃんは懲りない。叱られている最中はおびえた様子で「ごめんなさい、ごめんなさい」と謝っても、しばらくたつとまたふにやふにやした笑顔に戻って、同じことを繰り返してしまう。「3」

「じゅんちゃん、座つてなきやだめだよ」

僕は何度も言った。「少し静かにしてろよ」とも言ったし、「」とも、強い口調で言った。「4」

みんなと同じことを、同じようにやってほしかった。じゅんちゃんがみんなから、うんざりしたり迷惑がったりする目で見られてしまうのが、嫌だった。

でも、僕だってほんとうは迷惑だと思っていた。うんざりもしていた。

でも、僕たちは「あいぼー」だった。

でも、僕はもう知っていた。じゅんちゃんは、大きくなっても、僕たちとは違うおとなになつてしまふのだから。

でも、一緒にいたい。

でも、^①一緒にいても、僕たちはもう、じゅんちゃんの歌や踊りにおなかが痛くなるほど笑うことはないだろう。

「でも」を何度繰り返せば正しい答えにたどり着けるのか、あの頃の僕にも、いまの僕にも、わからない。

教室に連れ戻されるのを嫌がったじゅんちゃんが山口先生の手を噛みついたのは、二学期の終わり頃だった。先生のケガは軽かったが、腕^{うで}つぶしのからきし弱い——そもそも「戦う」ということがピンと来ていないようなじゅんちゃんが、そんな反抗的な態度をとったのは初めてだった。

三学期は、おばさんが毎日学校に来るようになった。廊下^{ろうか}から教室の中のじゅんちゃんの様子を見て、騒ぎすぎるようならおばさんが外に連れ出して、そのまま早退させる。じゅんちゃんが勝手に教室を飛び出してしまったときに校内を捜^{さが}し回るのもおばさんの役目だった。

ときどき僕と目が合うと、おばさんは笑ってくれる。寂^{さび}しそうに、申し訳なさそうに、泣きだしそうな顔で笑うのだ。

じゅんちゃんが学校をクビになるらしいという噂^{うわさ}が流れたのも、三学期が始まって間もない、ちょうどその頃だった。

冬休みに、教育委員会のひとつ校長先生がじゅんちゃんの両親を学校に呼んで、これからのことを話し合ったのだという。年が明けて学校が始まってからも、話し合いはつづいているのだという。

なんで——とは、僕たちの誰も思わなかった。^②やっぱりなあ、という顔になった友だちのほろが多かった。

四年生に進級すると、もっと勉強が難しくなつて、じゅんちゃんのことをもっと迷惑になってしまうだろう。五年生、六年生、中学生……これからずっと、じゅんちゃんはひとりぼっちのままでだろう。ひとりぼっちでも、じゅんちゃんは、ふにやふにやの笑顔で幸せそうに笑いつづけるのだろうか。

二月になっても、おばさんはじゅんちゃんの様子を見るために——見張りのために、学校に通いつづけた。

じゅんちゃんはおばさんの前でもおかまいなしに大きな声をあげ、授業中にうろうろと立ち歩く。やっぱりだめだ。じゅんちゃんは、もう僕たちと一緒にはいられない。僕にもわかつたし、先生にはもっと早くからわかつていたのかもしれないし、おばさんにも、わかつてしまったのだろう。僕と目が合っても、おばさんはもう笑わない。肩かたをすぼめ、背中を丸めて、いたたまれない様子で頭を下げるだけだった。ずいぶん瘦やせた。ウチの母よりも歳としが若いはずなのに、白髪しろがが増えて、光のあたる具合によってはおばあさんのように見えてしまうことまであった。

学校にはおじさんも来た。教室を飛び出したじゅんちゃんをつかまえると、おじさんは廊下中に音が響ひびきわたるほど強くじゅんちゃんの頬ほおをぶつた。そして、声を裏返して泣きわめくじゅんちゃんを抱だきかかえて、そのまま家に連れ帰ってしまった。

廊下に出てそれを見送った山口先生は、自分までぶたれたように顔をゆがめて教室に戻ると、「はい、授業授業」と僕たちに声をかけ、無理やり笑った。

夕食のあとで部屋に入ってマンガを読もうとした僕が、母に「ちょっと、ここに座って」と呼び止められたのは、その翌日のことだった。

母は僕の正面に座った。③ 正座をして、背筋せきを伸ばのばしていた。夕食の途中とちゆうだった父も箸はしを置き、僕を黙だまって見つめていた。

「ほんとうのところを教えてください？」

母はそう前置きして、「とつても大事なことから、正直に言つて」と念おぼを押した。僕は小さくうなずいた。口の中が急に渴かわいてしまった。

「じゅんちゃんのことだけど……どう？」

さすがに訊ききづらかったのだろう、母はあいまいな言い方をして、助けを求めるように父を見た。

父も最初は何度も咳せき払いをするだけだったが、やがて意を決したように僕をあらためて見つめ、

「授業の邪魔せまになつてるんじゃないか？」と言った。

「じゅんちゃんが？」

「そう。いまはおばさんが一緒について行つてるけど、同級生から見てもどうなんだ、おばさんがいないとやっぱり騒さわがしいのか、じゅんちゃん」

「……ちょっと」

おばさんがいても変わらないけど、とは言えなかった。

「ちよつとつて、どのくらいだ？ 先生の話が聞こえなくなるほどか？」

「……ときどき」

「正直に言えばいいんだからね」と母が口を挟んだ。

父は僕の緊張をほぐすように「おまえまで正座しないでいいよ」と笑って、「でもなあ」とのんびりした声でつぶけた。

「じゅんちゃんだって、もつと騒ぎたいのかもな。それをずっと我慢してらんだったら、かわいそうかもな」

そうかもしれない。でも、そうではないのかもしれない。

「特別な学校に行ったら、じゅんちゃんみたいな子もたくさんいるし、もつと自由に、伸び伸びできるのかもしれないよな」

そうかもしれない。でも、そうではないのかもしれない。

「まあ、せっかくみんなと同じ学校に入って、あと残り半分なんだから、卒業まで一緒についてうのもわかるけど……」

そうかもしれない。でも、そうではないのかもしれない。

父は「ちよつと難しすぎることを言うかもしれないけど、ごめんな、わかりやすく説明できないんだ」と僕に言った。その言葉じたい、まだ九歳の僕には難しすぎたが、黙ってうなずいた。

「要するに、じゅんちゃんにとって、どうするのがいちばん幸せなんだっていうことなんだよなあ、問題は」

幸せて言ってもわかんないか、と父は ^Bひとりごちて、「どうすればいつも楽しくいられるか、つてことだよなあ」と言い直した。

だったら答えは簡単だ。じゅんちゃんの笑顔が浮かぶ。じゅんちゃんはいつでも笑っている。

うれしいときも、悲しいときも、寂しいときも、怒っているときも、笑顔以外の表情はない。僕たちはみんな、じゅんちゃんの良い笑顔しか知らない。でも、もう、じゅんちゃんがどんなに笑っても、笑い返す友だちはいないのかもしれない。

「このままだと四年生になっても席が隣同士になるし、五年生のクラス替えでも同じだから。これから勉強もどんどん難しくなるし、いまみたいに授業がストップしちゃうと、みんなの迷惑になるし、隣の席にいたら、いちばん大変だし……」

母はそう言っ、「だから、素直に、正直に言っほしいの」と身を乗り出した。

④ 僕はうつむいてしまった。

なぜだろう。頭の中に、いろんなマンガのいろんな主人公の顔が浮かんだ。みんなカッコいい奴らばかりだった。男らしくて、勇気があって、友情を大切に、こういうときには、きつと顔を上げて、正々堂々と……。

うつむいたまま、口を小さく動かした。

ちよつと、迷惑してる——つぶやくように言った。

母には聞き取れなかったようで、「え？」と返されたが、父は「うん、よし、わかった、うん、うん」と部屋にこもった重苦しさを振り払うようにささばと言っ、「お風呂に入れよ、もう

沸わいてるだろ？」と笑いながら言った。

⑤ 僕の言葉がなにかの決め手になったわけではないだろう。子どもの一言に大切なことを委ねてしまうほど、おとなは無責任ではないし、残酷ざんこくでもない——と信じている。

僕がなにを答えようとも、すでに結論は出ていたのだ。

じゅんちゃんはおじさんに頬をぶたれた翌日から、学校に来なくなった。給食のパンを届けに行ってもずっと留守で、郵便受けからあふれた新聞は、母が片づけていた。

じゅんちゃんの一家が県庁のある大きな市に引っ越こすんだと母から聞いたのと、じゅんちゃんが転校するんだと山口先生から聞いたのは、どっちが先だっただろう。いずれにしても、三月に入って早々に団地の部屋は引き払われてしまった。

じゅんちゃんは最後まで学校には来なかった。

引っ越しのときにも姿を見なかった。

運送業者のひとと段ボールを運び出しているのは、おばさんだけだった。廊下で引っ越しの様子を見ている僕に気づくと、おばさんは「いままでありがとうね」と笑って、「これ、お別れにあげる」とエプロンのポケットから写真を一枚取り出した。まだ僕とじゅんちゃんが幼稚園に通っていた頃に、動物園でおばさんに撮とってもらった写真だった。

白黒の写真の中で、キリンを背にして僕と手をつないだじゅんちゃんは、やっぱりふにゃふにゃと、幸せそうに笑っていた。

じゅんちゃんは、元気ですか？

新しいウチの住所と電話番号を教えてください。

じゅんちゃんに、「さよなら」と伝えてください。

訊きたいことや伝えたいことはたくさんあるのに、言葉にならない。写真の中の僕たちを見つめたまま、顔を上げられない。

運送業者のひとに「すみませーん、奥おくさん、ちょっといいですかあ？」と呼ばれたおばさんは、じゃあね、と家に駆かけ戻った。僕はおばさんのいなくなった廊下にぺこんとおじぎをして、自分の家に戻った。

(重松 清「じゅんちゃんの北斗七星」より)

問1 ——線A「すつとんきょうな」、B「ひとりごちて」の意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A 1 突然とつぜんで調子はずれな

2 すっかり音程の狂くるった

3 機械的で無感情な

4 テンポに乗り遅おそれた

B 1 ひとり納得して

2 ひとりつぶやいて

3 ひとり考えて

4 ひとりうなずいて

問2 次の文は、もともと文中にあったものですが、どこにあったと考えられますか。入るべき部分として最もふさわしいものを文中の「1」～「4」から一つ選び、番号で答えなさい。

追いかけてようとする僕を、先生が「ああ、いいから、座ってなさい」と止めるようになったのも、二学期になってからだだった。

問3 空らん に入ることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 僕だって、うんざりだよ

2 うるさいんだよ、おまえ

3 先生、なんとか言ってみよ

4 寝ねるなよ、じゅんちゃん

問4 ——線①「一緒にいても、僕たちはもう、じゅんちゃんの歌や踊りにおなかが痛くなるほど笑うことはないだろう」とありますが、これは、僕たちがじゅんちゃんに対してどのよう
に感じはじめたからですか。次の文の空らん《 》に入れるのにふさわしいことばを文中から十五字でぬき出しなさい。

じゅんちゃんに対して《 》ようになっていたから

問5 ——線②「やっぱりなあ、という顔になった友だちのほうが多かった」とありますが、どういうことに対して「やっぱりなあ」と感じていると考えられますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 校長先生がじゅんちゃんのお母さんをお呼び出したということに対して、じゅんちゃんのお母さんだっけ苦勞をせおっているにちがいないと感じた、ということ。

2 じゅんちゃんが学校をクビになりそうだという噂がたったことに対して、じゅんちゃんのお母さんが抗議のために学校に乗りこんできたと感じた、ということ。

3 じゅんちゃんを無事に卒業させるための話し合いが年明けもおこなわれていることに対して、こたえなど出せるはずがないと感じた、ということ。

4 教育委員会のひとや校長先生とじゅんちゃんのお母さんが話し合っていることに対して、じゅんちゃんのお母さんへの処分についての話し合いだと感じた、ということ。

問6 ——線③「正座をして、背筋を伸ばしていた」とありますが、この時の「母」についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「僕」にとってはいやな話しをしなければならぬので、母親としての威厳を示して「僕」を説きふせようと考えている。

2 これから話そうとすることがとても大切であると同時にむずかしいことでもあるので、あらたまった態度になっている。

3 自分の話すことが「僕」やじゅんちゃんを傷つけることになってしまうので、無意識のうちにも緊張してしまっている。

4 まずは自分がきっかけを作るので、うまく話せないときには父にまかせたいという思いを示そうとしている。

問7 ——線④「僕はうつつむいてしまった」とありますが、この時の「僕」についての説明として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 母親からこたえをせまられているが、どうこたえていいかわからないでいる。

2 読もうと思っていたマンガのことが頭にうかんできて困ってしまっている。

3 マンガの主人公のようにふるまいたいのに、そうできない自分を恥じている。

4 じゅんちゃんともつと長くいっしょにいたかった、と悲しみをこらえている。

問8 ——線⑤「僕の言葉」とありますが、これはどの言葉を指していますか。文中からぬき出しなさい。

問9　じゅんちゃんとうふうの子とのちがいは、言動だけではなく表情にもあらわれていると考えられます。それはどんな表情ですか。文中から十字以内でぬき出しなさい。

問10　本文の内容についての説明としてふさわしいものを次から二つ選び、番号で答えなさい。

1 「僕」は幼なじみであるじゅんちゃんとうふうと仲良くしていきたいと考えているが、周囲の人々がじゅんちゃんを遠ざけていくにつれて、「僕」自身もじゅんちゃんと距離を置くことを決心した。

2　じゅんちゃんは、人ができないようなことを思い切ってやることでみんなの人気者となっていたが、自らみんなとは違うことを意識するようになった結果、まわりからうとまれることになった。

3　担任の山口先生は、あえて冷たく接することでじゅんちゃんを精神的に強くさせようとしているが、それをじゅんちゃんにまったく理解してもらえないことで、悔し涙を流すことさえあった。

4　以前は「僕」と目が合うと笑ってくれた「おばさん」も、二月になってじゅんちゃんが手に負えなくなると笑顔を見せることもなくなり、外見も実際の年齢以上にふけこんで見えることもあった。

5 「父」は自分の考えや意見をできるだけ押しつけないように、また「僕」のじゅんちゃんに対する気持ちにも配慮しながら、「僕」がじゅんちゃんと一緒に学校生活を送るのが無理だと伝えようとした。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

冬が来た

高村光太郎

きつぱりと冬が来た
八つ手の白い花も消え

A 公孫樹の木も箒ほうきになった

きりきりともみ込こむような冬が来た
人にいやがられる冬
草木に背かれ、虫類むしに逃にげられる冬が来た

冬よ

僕ぼくに來い、僕ぼくに來い

僕は冬の力、冬 X 僕 Y 餌食えじきだ

しみ透とおれ、つきぬけ
火事を出せ、雪で埋うめろ
刃物はのような冬が来た

問1 この詩に用いられている表現技法の組合せとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 文語で書かれており、直喩ちくゆや呼びかけが用いられている。
- 2 口語で書かれており、対句や体言止めが用いられている。
- 3 口語で書かれており、直喩や隱喩いんゆが用いられている。
- 4 文語で書かれており、隱喩や対句が用いられている。

問2 ——線A「公孫樹の木も箒ほうきになった」とは、どういうことを表そうとしていますか。次の空らん に入ることばを五字以内で答えなさい。

公孫樹の木の てしまったということ。

問3 文中の空らん X ・ Y に入る助詞の組合せとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 X 〓は Y 〓の
- 2 X 〓と Y 〓は
- 3 X 〓の Y 〓は
- 4 X 〓も Y 〓の

問4 作者がとらえている「冬」として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 漠然ぼくぜんとした不安
- 2 思いがけない幸運
- 3 絶え間ない緊張
- 4 越えるこべき試練

問5 作者は彫刻家ちやうこくとしても有名な人物ですが、この詩からはどのような作者の姿が感じられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 芸術家として、身近な人々の幸福を願おうとしている作者。
- 2 芸術家として、今までのあり方を振り返ろうとしている作者。
- 3 芸術家として、生きていく喜びをうったえようとしている作者。
- 4 芸術家として、今よりも一層高い境地を目指そうとしている作者。

4 次の①～⑤の各組の中には、構成のしかたが違^{ちが}うものが、それぞれ一つずつ含^{ふく}まれています。
その熟語の番号を答えなさい。

⑤	④	③	②	①
1	1	1	1	1
整然	未開	自動	出発	創造
2	2	2	2	2
劇的	不明	暗示	加熱	得失
3	3	3	3	3
公立	後味	長考	帰国	省略
4	4	4	4	4
酸性	無礼	国連	着陸	勤務

